



農学部 食料生命環境学科 准教授

わたなべ り え
渡辺理絵

農業を通じて、生命、自然、環境の重要性を学ぶ。

山形大学農学部

都市と農村の交流を生む仕組みについて研究しています

専門は人文地理学

私はこれまで日本の都市構造の問題に着目し、その原初形態から現在までの変化について考えてきました。近年、首都圏では市民農園が増えています。都市住民が余暇を農作業にあてたり、宿泊を伴って近郊の農村へ向かうケースも目立ちます。都市住民の余暇とお金の使い方が多様化し、都市にはない非日常の空間に新たな魅力を見い出しているのです。私は7年ほど前から都市の中の土地利用の変化とあわせて都市と農村の持続的なつながりをいかにして作っていくか、その研究を行っています。私は都市から農村を見えています。

都市から農村へ動く人の流れ

数年前から朝日町の棚田を見学に、東京から観光客が押し寄せます（朝日町榎平棚田）。こうした動きに地元住民の意識が変わります

（写真1）。台湾から観光客が押し寄せる先は冬の飯豊町です（写真2）。その中でも人口400人弱の中津川地区はインバウンド（日本へ来る外国人観光客）獲得へ積極的な動きを見せています。

「景観」という名の財産

都市住民はどのような理由で農村を訪れるのでしょうか？上記の例では観光客はなぜ、朝日町の棚田を見学に来るのでしょうか。重要なキーワードは「景観」です。「景観」とは人間の営為が加わった景色や風景を指します。たとえば「街並み」や「屋敷林」などです。近年、こうした「景観」を将来へ引き継ぐための体制づくりが活発化しています。地域住民にとっては日常風景に過ぎない「景観」が、将来へ引き継ぐための「景観」として認識した（された）時、都市住民の関心を呼び、地域では「景観」づくりと地域づくりが結びつくのです。



写真1：榎平の棚田を見学に来る東京からの観光客（山形県朝日町）



写真2：1月の飯豊町を訪れる台湾人観光客の様子。豪雪を観光資源に。



写真3：高齢化が進む鶴岡市の中心部では、定期的に近郊農村から農産物をのせて販売者が訪れる。



写真4：鶴岡市朝日地域にて地元住民と将来のあり方について話し合う。